様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　３月３１日現在

機関番号：12602
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2010
課題番号：21792252
研究課題名（和文）　口唇口蓋裂をもつ児の乳児期における育児支援プログラム開発のための介入研究
研究課題名（英文）　Intervention research on the development of parenting support program for mothers and infants with the cleft lip and palate
研究代表者
岡光　基子（OKAMITSU MOTOKO）
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教
研究者番号：20285448

研究成果の概要（和文）：
乳幼児期までの親子相互作用は良好な親子関係や子どもの成長発達の促進のために重要であるとされている。口唇口蓋裂をもつ児は、出生直後より授乳場面で困難を生じやすいことや様々な工夫を取り入れなければならないことから、母親はストレスが高いことがわかっている。口唇口蓋裂をもつ乳児を母親が養育する過程において、食事（授乳）場面における親子相互作用の縦断的な変化を明らかにし、そのような母子への効果的な育児支援の介入方法について検討することを目的とした。

研究成果の概要（英文）：
Mother-infant interactions are regarded as one of the most important domains of the mother-infant relationship, and they influence the child development. Specific technical difficulties associated with cleft lip and palate commonly result in stressful feeding situation. This study examined the changing process about the quality of mother-infant interaction during the first year, and the development of parenting support program to promote the mother-infant relationship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：口唇口蓋裂，育児支援，乳児，親子相互作用，授乳(食事)，日本語版 NCAFS

１．研究開始当初の背景

現代の育児環境は、小児虐待など複雑な社会問題をかかえており、多様化する家族のニーズに対応できる乳幼児精神保健の実践が求められている。乳幼児期までの親子相互作用は良好な親子関係や子どもの成長・発達の促進のために重要であるとされているが、国内におけるこれまでの研究では親子相互作用に関する研究は少なく、特に実践的な新たな支援の具体策についてはほとんどふれら

れていない。

口唇口蓋裂をもつ乳児の授乳においては、母親は様々な工夫を取り入れなければならないことから、母親はストレスが高いことがわかっており、また児の成長発達が著しく遅れることや母子関係に影響を及ぼすことも報告されている。これまで口唇口蓋裂をもつ乳児の親子相互作用について、健常児に比べて反応性が乏しく、さまざまな問題を抱えていることが報告されている。口唇口蓋裂をもつ乳児とその母親は、出生直後より授乳場面で困難を生じやすいことや、児の発語がスムーズでないことや表情の変化が少なく児の反応性が読み取りにくいこと、母親は自責の念を抱えながら子どもの障害を受容できないことなどが指摘されており、親子相互作用の促進に向けた支援が求められている。

２．研究の目的

口唇口蓋裂をもつ乳児期の子どもを母親（家族）が養育する過程において、食事（授乳）場面における親子相互作用がどのように変化していくのかを把握し、そのような母子への効果的な育児支援の介入方法について検討することを目的とする。

・親子相互作用は、月齢 12 か月時までの間にどのように変化していくかを明らかにする。

・母子の属性および親子相互作用、児の発達、母親の育児ストレス、母親の抑うつ傾向、ソーシャルサポートとの間の関連性は、どのように変化していくかを明らかにする。

・得られた効果から具体的な介入方法について検討する。

３．研究の方法

関東都市部の大学病院の口腔外科外来にて対象者を選定し、外来受診時に調査を実施した。対象は、口唇口蓋裂をもつ乳児期の母子 19 組。研究協力への承諾が得られた者を対象とし、月齢 2～4 か月時から 1 歳時までの期間、計 4 回の調査を行った。母子の食事（授乳）場面の観察と質問紙調査、面接調査を行った。親子相互作用の質を観察する尺度として、食事（授乳）場面の観察は日本語版 NCAFS(Nursing Child Assessment Feeding Scale)が用いられ、外来に設置されている授乳室でﾗｲﾌﾞにて行い、ﾗｲｾﾝｽを持つ者がｺｰﾃﾞｨﾝｸﾞを行った。質問紙は、妊娠出産・健康状態に関する質問票、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査、津守式乳幼児精神発達質問紙、日本版 Parenting Stress Index(PSI)、子ども総研式育児支援質問紙、日本版 GHQ30、抑うつ（CES-D スケール)、ｿｰｼｬﾙｻﾎﾟｰﾄに関する質問紙、ﾈｯﾄﾜｰｸ調査票を用いた。

なお、日本語版 NCAFS は、食事（授乳）場面の母子の相互作用を測定するもので、「子どもの cue に対する感受性」「子どもの不快な状態の緩和」「社会-情緒的発達の促進」「認知発達の促進」の親側 4 下位尺度 50 項目(最高得点：50 点)と、「cue の明瞭性」「養育者への反応性」という子ども側 2 下位尺度 26 項目(最高得点：26 点)とから構成され、さらに親と子それぞれの随伴性得点も算出される。得点が高いほど相互作用が良好とされる。

４．研究成果

対象となった日本人母子の属性は以下に示す通りである。子どもの平均月齢は Time1 で 2.42 か月(SD=0.51)、Time2 で 5.79 か月(SD=0.63)、 Time3 で 8.58 か月(SD=0.69)であった。子どもの性別は男児 10 名(52.6%)、女児 9 名(47.4%)、子どもの平均出生体重は 2911.5g(SD=442.5)であった。出生順位が第 1 子の子どもは 11 名(57.9%)であった。母親の平均年齢は 31.5 歳(SD=6.4)で、母親の平均

教育年数は14.3年(SD=1.5)であった。

口唇口蓋裂をもつ児とその母親の親子相互作用の経時的な変化が明らかとなり、属性や他の変数との関連性の検討を行った。口唇口蓋裂をもつ児とその母親の親子相互作用について、各時期の総合得点の平均値はTime1で56.6(SD=7.2)、Time2で60.2(SD=7.4)、Time3で61.1(SD=6.5)であった。親総合得点の平均値は、Time1で40.1(SD=4.7)、Time2で41.1(SD=4.6)、Time3で41.4(SD=4.7)で、子ども総合得点の平均値は、Time1で16.6(SD=3.7)、Time2で19.1(SD=3.4)、Time3で19.6(SD=2.7)であった。子ども総合得点は、健常児基準値データと同様に、子どもの月齢が上がるのに伴い、高くなることが明らかとなり、特に生後半年間までに、著しい発達的変化が認められることがわかった。

調査開始時の授乳に関する問題では、哺乳力低下、体重増加不良、時間がかかる、鼻腔からの逆流、気道内の分泌物貯留などが挙げられ、授乳場面で困難を生じることなどについて母親の不安が強かった。また、児の発達の遅れなどの問題に関することや合併症など疾患に関すること、離乳食の進め方などについての不安があり、各時期に応じた継続的なきめ細かな支援の必要性が明らかとなった。また、口唇口蓋裂をもつ児とその母親への乳児期に早期の親子相互作用の促進に向けた援助の必要性が示唆された。

今回、得られた結果は、口唇口蓋裂をもつ児とその家族への乳児期における育児支援プログラム開発のための一資料として役立てたい。今後は、さらに育児支援プログラムの開発のための有効な具体的方法を提示することにより、児の成長・発達を促進し、口唇口蓋裂をもつ児とその家族がより健全で安心できる生活を送ることができるような支援につなげていけるよう継続していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

1) Hirose T., Okamitsu M., Kusanagi M., Koumoto K.: IMH practices of multiple healthcare workers in Japan. World Association for Infant Mental Health, Leipzig, 2010.
2) 廣瀬たい子，岡光基子，長優紀子，永吉美智枝，村松美智：看護臨床で使うNCAST―4事例から―．第 30 回日本看護科学学会学術集会（交流集会），札幌市，2010.

６．研究組織
(1)研究代表者
岡光　基子（Motoko Okamitsu）
研究者番号：２０２８５４４８
分担研究者はなし